

水辺を生かしたまちづくり



かねこ けんじ
金子 健次
やながわ
柳川市長(福岡県)



なかひら まさひろ
中平 正宏
しまんと
四万十市長(高知県)



ふくい まさあき
福井 正明
たかしま
高島市長(滋賀県)



たかはし つとむ
高橋 努
こしがや
越谷市長(埼玉県)

司会・コーディネーター

ほその すけひろ

細野 助博

中央大学総合政策学部教授

市民に安らぎや憩いをもたらすと同時に、良好な景観形成、観光・交流においても重要な役割を果たす「水辺空間」。国土交通省でも「かわまちづくり」支援制度や「ミズベリリング・プロジェクト」など水辺の整備に関する支援制度を整えるとともに、自治体においても、市民団体等と連携しながら、効果的な水辺の活用、水質保全、適切な湧水管理などに取り組む事例が増えています。

座談会では水辺を生かしたまちづくりに取り組む高橋・越谷市長、福井・高島市長、中平・四万十市長、金子・柳川市長にお集まりいただき、それぞれの都市の水辺空間の特徴、官民一体となった整備の在り方、今後の展望などについて、幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

広大な水辺空間と 都市生活空間を融合させた 「親水文化創造都市」の形成を 目指して、まちづくりに 取り組んでいます。



高橋 努
越谷市長(埼玉県)

憩いのスポット「水辺空間」を官民で整備

細野 水害から人々の生命や生活を守るためにも、「治水」は行政において欠かせない事業ですが、近年はこれに加えて、「親水」の観点から、多くの住民が憩い、集える水辺空間の整備に力を入れる自治体も増えてきました。いかに快適な水辺を市民とつくりあげるかは、まちづくり

の重要なテーマになりつつあります。それでは、各都市における水辺の特徴や取り組みについてお聞かせいただきたいと思っています。

高橋 越谷市は豊かな水と緑に恵まれ、古くから「水郷こしがや」として親しまれてきた地域です。中でも、市の南東部に位置する越谷レイクタウンを含む一帯は元荒川、中川をはじめとする多くの河川が流れる低湿地帯にあり、かつては水田が広がる田園地帯でした。しかし、市街化の急激な進行とともに、農地周辺はスプロール化が進み、豪雨を伴う台風時にはたびたび浸水被害が生じるなど、治水対策の必要性が高まってきました。



そこで、昭和63年4月に国の新規事業として創設されたのが、治水対策を目的とする河川事業による大規模

調節池建設と、土地区画整理事業による新市街地整備を一体的な事業として行う「レイクタウン整備事業」です。平成8年、事業の都市計画決定を行い、平成11年に当時の都市基盤整備公団（現在…独立行政法人都市再生機構）を施行者とする「越谷レイクタウン特定土地区画整理事業」がスタートし



地域ににぎわいと安心をもたらす「越谷レイクタウン」の大規模調節池(越谷市)

更しております。

計画面積は225.6ha、計画人口2万2400人のニュータウンですが、この7月現在の区内人口は1万2392人。まだ道半ばではありますが、広大な水辺空間と都市生活空間を融合させた全国でも例を見ないモデル的なまちづくりとして、「親水文化創造都市」の形成を目指しています。

福井 琵琶湖は、高島市に限らず、滋賀県における代表的な地域資源です。地理的に見ても、琵琶湖の面積は県全体の6分の1。当然、私たちの暮らしや文化に深く根付いています。さらに、淀川水系の水源でもある琵琶湖は、近畿地方1450万人の生活を保障する、いわばダムのような存在でもあります。そうした事情もあり、私たち滋賀県民はかねてから合成洗剤の使用の禁止に取り組むなど、県を挙げて水質浄化に努めてきました。

高島市においても、琵琶湖は地域文化や景観

ました。事業は順調に進み、平成20年3月にJR武蔵野線越谷レイクタウン駅が開業し、同年4月にまちびらきを行いました。平成26年11月には換地処分公告が行われ、新町名「レイクタウン一丁目から九丁目」に変



住民の暮らしを支える、豊富な湧水を利用した「カバタ」(高島市)

中平 四万十川は、高知県津野町の不入山を源流に、四国南西地域を大きく蛇行しながら、四万十市で太平洋に注ぐ一級河川です。幹線流路は196kmと四国

に欠かせない、大切な資源です。国から指定された3件の重要な文化的景観はその象徴といえるでしょう。具体的には、湖岸に石積みが築かれ、伝統的な漁法が今も残る「海津・西浜・知内の水辺景観」、安曇川の伏流水が豊富で、湧水とともに暮らす生活が今も受け継がれている「針江・霜降の水辺景観」、古くから古式水道や水路が発達するとともに、大溝城の外堀として形成された内湖・乙女ヶ池が残る「大溝の水辺景観」の3つです。これまで重要な文化的景観は全国で50件選定されていますが、1市町村で3件も選ばれた例は高島市をおいてほかにありません。重要な文化的景観に指定された地域では協議会を形成して、環境の保全に努めるとともに、観光などへの活用を含め、これらの景観を積極的にまちづくりに生かしています。

また、平成27年には、滋賀県と大津市、彦根市、近江八幡市、東近江市、米原市とともに、日本遺産「琵琶湖とその水辺景観―祈りと暮らしの水遺産」にも認定されました。



福井 正明
高島市長(滋賀県)

琵琶湖は地域文化に
欠かせない、大切な資源。
全国で初めて、1市町村で
重要な文化的景観に
3件も選ばれました。

最長で、支流は319本に及びます。本流にダムもなく、水がきれいで、多種多様な動植物が生息していることなどから、「日本最後の清流」とも称されています。さらに、増水時にあえて川に沈んでしまうように設計された「沈下橋」をはじめ、流域には川と人とのかわりを感じられる、独自の風景や暮らしが数多く残っています。こうした四万十川の美しい清流や自然を守

ろうと、四万十市では前身の中村市時代から、市民憲章や宣言、条例制定、自主規制などにも積極的に取り組んできました。

特に、平成元年に「四万十の日制定宣言」を行って以来、同年に立ち上げられた「四万十の日実行委員会」を母体に、官民一体となって、清流保全や河川環境の向上に向けた取り組みを進めてきました。四万十川やその周辺の自然を教室に見立てた「水辺の楽校」、伝統漁法体験や川に触れ合うレクリエーションを行う「四万十川ガキ体験」など、子どもを対象にした環境学習もその一例です。ほかにも、流域の市町の住民と一体となった清掃活動や水質浄化活動、さらには森林トラスト事業、友好河川提携による他都市との交流など、活動は多岐にわたります。

加えて、人と自然とが共生できていた昭和40年代の四万十川の原風景の保全・再生を目的に、国土交通省の支援を受けて、「アユの瀬づくり事業」「ツルの里づくり事業」「魚のゆりかごづくり事業」などからなる「四万十川自然再生事業」にも、市民との協働で取り組んでいます。

金子 柳川市は水が豊富にあるまちとイメージされている方も多いでしょうが、矢部川の最下流に位置するため、かつては水の確保に大変苦労してきた地域です。そうした事情から、水稲耕作に必要なかんがいと排水、生活用水の確保を担う「掘割」網を徐々に形成、先人の知恵と技術によって、市全域に大小の掘割が網の目のように巡る独特の景観が築かれました。その総延長は、福岡空港から羽田空港までよりも長い930kmにも及びます。中

でも城堀は、歴史的文化遺産としても評価が高く、平成27年3月には「水郷柳河」として、国の名勝に指定されました。

かんがいや排水はもちろんのこと、洪水からまちや人を守るとともに、城下防衛や生活用水の供給源として、また人や資材の運搬路として、掘割は重要な役割を果たしてきました。しかし、輸送が陸路中心になり、上水道の普及、農作業の近代化、雑排水の流入などが進むと、市民の生活を支え、やすらぎと潤いをもたらしてきた掘割の姿は一変します。悪臭を放ち、逆に環境を阻害するようになっていきました。その結果、川下りコースを残して、ほかは全面的に埋め立てて、下水溝に取り換える計画まで立てられましたが、最終的には行政と市民が一緒になって浚渫作業を行うなどして、掘割を再生させたという経緯があります。



沈下橋を走り抜ける「四万十川ウルトラマラソン」のランナーたち(四万十市)

その後、時を経て、平成10年には「水憲法」といわれる「柳川市掘割を守り育てる条例」を、そして平成24年には柳川市景観条例と景観計画を策定しました。現在は、これらに基づき、掘割の環境保全、柳川市ならではの景観の維持向上に向け

四万十川の美しい清流や自然を守ろうと、市民憲章や宣言、条例制定、自主規制などにも取り組んできました。



中平 正宏
四万十市長(高知県)

た取り組みを、市民と連携しながら継続的に進めています。

地域住民の自主的な取り組みに期待

細野 水辺空間は、地域住民にとっては憩いの場でもあり、地域文化にも深く結びついています。

この環境を守るためにも、市民との連携は非常に重要なテーマですね。

金子 掘割を大切にすることは、今の市民にも

しっかりと受け継がれています。年に1回城堀の水を抜く、伝統的な「水落ち」に合わせ、掘割の底や周辺の道を一齐に清掃する「堀と道クリーンアップ大作戦」には、市民・ボランティア団体を含め、約2000人が参加しています。

中平 まちの風景は、一度失ってしまうと、取り返しのつかない貴重な地域資源です。四万十市の代表的な風景として、緑の山々と青い清流、そして沈下橋の織り成す美しい景色が挙げられますが、平成21年に岩間地区に架かる沈下橋の背後林を伐採する計画が浮上しました。その際には、四万十川の大事な景観を失ってはならないと、地元の皆さんと協力して、森林の借り上げ、保存活動を実施して、最終的に景観を守ることができました。

福井 先程申し上げたように、重要文化的景観ではそれぞれ協議会を立ち上げて、独自の活動を行っているのですが、中でもユニークなのが、針江(「針江・霜降の水辺空間」という集落の取り組みです。豊富な湧水を利用した「カバタ」(川端)と呼ばれる水の循環システムを、今も暮らしに取り入れているだけでなく、見学料を徴収した上で、市外から訪れる人にカバタを紹介する取り組みも行っています。今では国内外から1万人の方がいらっしゃるなど、観光の分野でも大きな役割を果たしています。ちなみに、この協議会に関しては、市として経済的な支援はまったく行っていません。すべて住民の皆さんの自主性、主体性にお任せしています。

中平 四万十市では、平成20年度に「四万十川清流保全基金」を制度化しました。市内のスー



金子 健次
柳川市長(福岡県)

「おもてなしの心日本一」を掲げ、全市を挙げてあいさつ運動や清掃活動、親切運動などに取り組んでいます。

パ―事業者と提携して、レジ袋を有料化し、お客さんがレジ袋を辞退すると、その分を基金への寄付に充てるというもので、これまでに寄付額は1200万円に及びます。この市民からの寄付金を使って、環境学習や清掃活動などの取り組みが進められています。

また、資金面に限らず、行政があまりかわりすぎると、担当者が異動したときに、混乱が



生じ事業が停滞する可能性も出てきます。やはり、住民主導の方が、息の長い取り組みになると思っています。

高橋 越谷レイクタウンの大相模調節池は、河川管理者である埼玉県から包括占用の許可を受け、越谷市が施設の維持管理などを行っていますが、芝刈りや清掃、樹木の管理などは市民と協働で実施しています。

います。なお、調節池のほとりには、地域交流の場としても活用できる「越谷レイクタウン水辺のまちづくり館」が設置されており、芝刈りや清掃などの活動をしていただいた方には、同館の利用券を発行するなど、ボランティア活動を促進する仕組みも導入しています。

また、治水機能のある調節池を平常時は市民が自然と触れ合い、憩い、活動を行う空間として利用できることなどが評価され、「平成28年度都市景観大賞(都市空間部門)」において大賞(国土交通大臣賞)を受賞いたしました。

観光資源として活性化に貢献

細野 水辺は人々の暮らしや伝統文化に係するだけでなく、福井市長がおっしゃったように観光資源としても注目されるよう

になってきました。水辺空間を地域活性化や交流人口にいかにつなげるかという観点からお考えをお聞かせください。

高橋 越谷レイクタウンには、国内最大級の大型複合商業施設「イオンレイクタウン」があります。全体の店舗数は710店、年間来場者数は約5000万人にも及びます。このにぎわいをいかに市全体に波及させるかが大きな課題です。現在、一般社団法人越谷市観光協会と連携し、回遊性のある地域づくりに向けて、さまざまな取り組みをしています。

福井 高島市は重要文化的景観以外にも、多くの名所、見どころがあります。実際、日本の白砂青松百選、日本の棚田百選、新・日本街路樹100景など、いわゆる100選に選ばれた名所は市内に14カ所もあります。中でも人気があるのが、新・日本街路樹100景に選定された「マキノ高原のメタセコイア」。道沿いに2・4kmにわたって、約500本のメタセコイアが植えられているのですが、韓流ブームの火付け役となった『冬のソナタ』の並木道に似ているということで、話題になりました。高島市には現在、450万人もの観光客が訪れていますが、水辺



掘割をどんこ舟で下る川下りは柳川観光の目玉(柳川市)



細野 助博
中央大学総合政策学部教授

も含め、名所の魅力を総合的に発信し、さらに交流人口を増やしていきたいと考えています。

中平 水辺をいかに効果的に活用するかという点も重要でしょう。四万十市では、春「四万十川フルウォーク」、夏「四万十川水泳マラソン」、秋には「四万十川ウルトラマラソン」、四万十川を周遊するロードレース「四万十ドラゴンライド」など、四万十川を生かしたさまざまなスポーツイベントを開催しています。「四万十川ウルトラマラソン」は毎年のように応募者が増えていますし、昨年は「四万十ドラゴンライド」に挑戦する姿を描いた映画作品『あらうんど四万十』も公開。海外の映画祭にも招待されるなどして、地域の知名度も上がってきました。

金子 柳川市でも、ソーラーボート大会や、郷土の詩人、北原白秋先生にちなんだ「白秋祭水上パレード」など、掘割を生かしたイベントも多数開催しています。加えて、わが市が目指しているのが、柳川を訪れた人に「来てよかった」「また来たい」と感じてくれる、柳川ファンをつくること。その実現のためにも、「おもてなしの心日本一」を掲げ、全市を挙げてあいつつ運動や清掃活動、親切運動などにも取

り組んでいます。先ほどの「堀と道クリーンアップ大作戦」も、このおもてなしの一環として行っています。

より魅力的な親水空間をつくるために

細野 最後に水辺を生かしたまちづくりを展開するに当たっての今後の課題をお聞かせください。

高橋 調節池のほりにある「越谷レイクタウン水辺のまちづくり館」では、バーベキュー、グルメ屋台、イベントの展開などができるスペースを確保しているほか、調節池ではアクセスディングー（小型ヨット）やカヌーなども楽しめます。今後も、にぎわいのある、より魅力的な水辺空間の形成に努めたいと思います。

福井 平成27年に、日本遺産に認定されましたが、まだ文化財の保護に力を入れるのか、観光振興につなげていくのか、方針が定まっていない面もあります。認定を受けた県や他市と連携し、今後の方策を決定した上で、国内外に情報を積極的に発信していきたいと考えているところです。

中平 観光客を増やすためにも、高速道路を含め道路網の整備が欠かせません。さらに、私が学生のとくに比べたら、雨が降った後の川の増水、減水など、スピードが明らかに変わっています。植林地の荒廃、山の保水力なども含めて、どう自然環境を守っていくのかという点も、今後の課題になると思います。

金子 掘割をどんこ舟で下る川下りは柳川観光の目玉ですが、最近では台湾をはじめ、外国からの観光客も増えてきました。船頭さんの軽快な語りや舟歌を、どのように外国の方に分かりや

すく伝えるのかという点も大きな課題です。

細野 日本人は何世代にもわたって、環境に配慮した暮らしを営むなど、自然に優しい国民性を有してきました。高度成長期を中心に、河川の荒廃が進んだ時期もありましたが、近年は官民一体となって水質の浄化、快適な水辺空間の整備に積極的に取り組んでいることが、皆さまのお話でよく分かりました。また、水辺自体を観光資源として活用する取り組みには、新しいまちづくりの可能性を感じました。今後も住民と連携して、大事な地域資源である水辺を生かしたまちづくりを活発に進めていかれることを願っています。本日はどうもありがとうございます。

（平成28年7月13日、全国都市会館にて開催）

本コーナーは隔月掲載となります。次回は1月号に掲載予定です。



